



E-ASIA
university of oregon libraries

<http://e-asia.uoregon.edu>

明治美人伝

長谷川時雨

初出：「解放 明治文化の研究特別号」

1921（大正10）年10月

明治美人伝

長谷川時雨

一

空の麗^{うるわ}しさ、地の美しさ、万象の妙^{たえ}なる中に、あまりにいみじき人間美は永遠
を誓えぬだけに、脆^{もろ}き命に激^{はげ}しき情熱の魂をこめて、たとえしもない刹那^{せつな}の美を
感じさせる。

美は一切の道徳^{どうとくきく}規矩を超越^{ほこ}して、ひとり誇らかに生きる力を許されている。古
来美女たちのその実際生活が、当時の人々からいかに罪^{さげ}され、蔑^{おと}すまれ、下^{おと}しめら
れたとしても、その事實は、すこしも彼女たちの個性的価値^{ねうち まっさつ}を抹殺^{まっさつ}する事は出来
なかつた。かえって伝説化された彼女らの面影^{えいごう}は、永劫^{えいごう}にわたって人間生活に夢と
詩とを寄与^{きよ}している。

小さき夢想家であり、美の探求^{たんきゅうしや}者であるわたしは、古今の美女のおもばせを
慕つてもろもろの書史^{ふみ}から、語草^{かたりぐさ}から、途上の邂逅^{かいこう}からまで、かずかずの女
人をさがしいだし、その女たちの生涯^{ひと}の片影^{へんえい}を記^{しる}しとどめ、折にふれて世の人
に、紹介することを忘れなかつた。美しき彼女たちの（小伝）は幾つかの巻となって世

の中に読まれている。

そしてわたしの美女に対する^{こま}細かしい観賞、きりきざんだ小論はそうした書にしるしておいた。ここには^{みかた}総論的な観方で現代女性を生んだ母の「明治美人」を記して見よう。

それに先だつて、わたしは^{ここ}此処にすこしばかり、現代女性の美の特質を幾分書いて見なければならない。それはあまりに急激に、世の中の美人観が変つたからである。古来、各時期に、特殊な美人型があるのはいうまでもないが、「現代は驚異である」とある人がいったように、美人に対してもまたそういうことがいえる。

現代では^{どはず}度外れということや、^{とつび}突飛ということが辞典から取消されて、どんなこともあたり前のこととなつてしまつた。実に「驚異」横行の時代であり、爆発の時代である。各自の心のうちには、空さえ飛び得るという自信をもちもする。まして最近、^{おり}檻を蹴破り、^{しっこく}桎梏をかなぐりすてた女性は、当然ある^{たか}昂ぶりを胸に抱く、そこで古い意味の（調和）古い意味の（諧音）それらの一切は考えなくともよいとされ、現代の女性は（不調和）のうちに調和を示し、音楽を夾雑音のうちに聴くことを得意とする。女性の胸に燃えつつある自由思想は、各階級を通じて（化粧）（服装）（装身）という方面の伝統を蹴り去り、外形的に（破壊）と（解放）とを宣言した。^{ととの}調わないう複雑、出来そくなつた変化、メチヤメチヤな混乱——いかにも時代にふさわしい異色を示している。

時代精神の中樞は自由である。束縛は敵であり跳躍は味方である。各自の気分によつて女性は、おつくりをしだした。美の形式はあらゆる種類のもものが認識される。

黒狐の毛皮の、^{はくせいひょうほん}剥製標本のような獣の顔が紋服の上にあつても、その不調

和を ^{なんびと}何人も怪しまない。十年前、メエテルリンク夫人の ^{ひよう}豹の ^{がいとう}外套は、

^{フランス}仏蘭西においても、^{アメリカ}亜米利加においても珍重されたといわれるが、現代の日本においては、気分的想像の上ですでにそんなものをば通り越してしまっている。

その奔放な心持ちは、いまや、行きつくところを知らずに ^{こんとん}混沌としている。けれ

ども、この思い切った ^{とつび}突飛の時代粧をわたしは愛し尊敬する。なぜならば進化はいつも混沌をへなければならぬし、改革の第一歩は勇氣に根ざすほかはない。いかに

^{じゆんか}馴化された美でも、古くなり気が抜けては、生氣に充ちみちた時代の気分と合わなくなってしまう。混沌たる中から新様式の美の発見をしなければならない。そこに新日本の女性美が表現されるのであるから——

なごやかな、そして ^{しめ}湿やかな、^か噛みしめた味をよろこぶ追懐的情緒は、かなり急進論者のように見えるわたしを、また時代とは逆行させもするが、過激な生活は動的の美を欲求させ、現代の女性美は現代の美の標準の方向を表示しているともいえるし、現代の人間が一般的に、どんな生き方を欲しているかという問題をも、痛切に表現している

ともいえる。で、その時代を ^{かも}醸した、前期の美人観をといえば、一口に、明治の初期は、美人もまた英雄的であつたともいえるし、現今のように一般的の——おしなべて美女に見える——そうしたのではなかつた。「とても昔なら ^{しこめ}醜女とよばれるのだが、当世では美人なのか。」と、今日の目をもたない、古い美人観にとらわれているものは歎声を発するが、徳川末期と明治期とは、美人の標準の度があまりかけはなれてはいなかつた。

無論明治期にはいつて、丸顔がよろこばれてきていた。「色白の丸ポチャ」という言葉も出来た。女の眼には鈴を張れという前代からの言いならわしが、力強く表現されて

きている。けれど、やはり ^{うりざねがお} 瓜 ^{しも} 実 ^{かく} 顔 ^{かく} の ^{しも} 下 ^{かく} ぶ ^{かく} くれ——鶏卵形が尊重され、角 ^{かく} ばつ

たのや、^{ひたい} 額 ^{あご} の出たのや、顎 ^{あご} の突出たのをも異国情緒——個性美の現われと悦ぶよ
うなことはなかった。

瓜実顔は勿論徳川期から美人の標型になっていた。その点で明治期は美人の型を破り、
革命をなし^と遂げたとはいえない。そして瓜実顔は上流貴人の相である。その点で明治美
人は伝統的なものであり、やはり因習にとらわれていたともいえる。維新の政変はお百
姓の出世時 ^{しゅつせどき} というようなことを、都会に生れたものは口にしていたが、「お百姓

の出世」とは、幕府 ^{じきさん} 直 ^{ざむらい} 参 ^{ざむらい} でない、地方 ^{ざむらい} 侍 ^{ざむらい} の出世という意味で、決して今日の
ように民衆の時代ではなかった。美人の型もおのずから法則があつた。

とはいえ、徳川三百年の時世にも、美人は必ずしも同じ型とはいえない。浮世絵の名
手が描き残したのを見てもその推移は知れる。春 ^{はるのぶ} 信 ^{しゅんしょう}、春 ^{うたまる} 章 ^{うたまる}、歌 ^{うたまる} 磨 ^{うたまる}、

くにさだ
国 ^{くにさだ} 貞 ^{くにさだ} と、豊満な肉体、丸顔から、すらりとした姿、脚と腕の肉付きから腰の丸味

—— ^{ふじびたい} 富 ^{ふじびたい} 士 ^{ふじびたい} 額 ^{ふじびたい} —— ^{じみ} 触 ^{じみ} 覚 ^{じみ} から ^{じみ} い ^{じみ} え ^{じみ} ば ^{じみ} 柔 ^{じみ} ら ^{じみ} か ^{じみ} い ^{じみ} 慈 ^{じみ} 味 ^{じみ} の ^{じみ} し ^{じみ} た ^{じみ} た ^{じみ} る ^{じみ} 味 ^{じみ} から、幕末へ来ては齒あ

たりのある苦みを含んだものになっている。多少骨つぽくなって、頭髮などもさらりと

あら ^{ぬめ} 粗 ^{ぬめ} つ ^{あしで} ぽ ^{あしで} い ^{ひつたが} 感 ^{ひつたが} じ ^こ が ^こ する。羽二重や、^{ぬめ} 続 ^{ぬめ} や、^{あしで} 芦 ^{あしで} 手 ^{あしで} 模 ^{あしで} 様 ^{あしで} や ^{ひつたが} 匹 ^{ひつたが} 田 ^{ひつたが} 鹿 ^{ひつたが} の ^こ 子 ^こ の ^こ 手 ^こ ざ ^こ わ ^こ り ^こ で ^こ は

なく、^{すきや} ゴ ^{すきや} リ ^{すきや} ゴ ^{すきや} リ ^{すきや} す ^{すきや} る ^{すきや} 浜 ^{すきや} ち ^{すきや} り ^{すきや} め ^{すきや} ん、^{ゆかた} 透 ^{ゆかた} 綾 ^{ゆかた}、^{ゆかた} また ^{ゆかた} は ^{ゆかた} 浴 ^{ゆかた} 衣 ^{ゆかた} の ^{ゆかた} 感 ^{ゆかた} 触 ^{ゆかた} と ^{ゆかた} な ^{ゆかた} っ ^{ゆかた} た。しかしこれは

おも ^{けいはんいしよく} 主 ^{けいはんいしよく} に ^{けいはんいしよく} 江 ^{けいはんいしよく} 戸 ^{けいはんいしよく} の ^{けいはんいしよく} 芸 ^{けいはんいしよく} 術 ^{けいはんいしよく} で ^{けいはんいしよく} あ ^{けいはんいしよく} り、^{けいはんいしよく} 風 ^{けいはんいしよく} 俗 ^{けいはんいしよく} で ^{けいはんいしよく} あ ^{けいはんいしよく} る。京 ^{けいはんいしよく} 阪 ^{けいはんいしよく} 移 ^{けいはんいしよく} 殖 ^{けいはんいしよく} の ^{けいはんいしよく} 美 ^{けいはんいしよく} 人 ^{けいはんいしよく} 型 ^{けいはんいしよく} が、^{ようや} 漸 ^{ようや} く、^{ようや} 江 ^{ようや} 戸 ^{ようや}

ね ^{もくめ} お ^{もくめ} い ^{もくめ} 根 ^{もくめ} 生 ^{もくめ} の ^{もくめ} 個 ^{もくめ} 性 ^{もくめ} あ ^{もくめ} る ^{もくめ} も ^{もくめ} の ^{もくめ} と ^{もくめ} な ^{もくめ} っ ^{もくめ} た ^{もくめ} の ^{もくめ} だ ^{もくめ} っ ^{もくめ} た。錦 ^{もくめ} 絵 ^{もくめ}、芝 ^{もくめ} 居 ^{もくめ} から ^{もくめ} 見 ^{もくめ} て ^{もくめ} も、洗 ^{もくめ} い ^{もくめ} だ ^{もくめ} し ^{もくめ} の ^{もくめ} 木 ^{もくめ} 目 ^{もくめ} を

この ^{みが} ん ^{みが} だ ^{みが} よ ^{みが} う ^{みが} な、^{みが} 江 ^{みが} 戸 ^{みが} 系 ^{みが} の ^{みが} 素 ^{みが} 質 ^{みが} を ^{みが} 磨 ^{みが} き ^{みが} 出 ^{みが} そ ^{みが} う ^{みが} と ^{みが} し ^{みが} た ^{みが} 文 ^{みが} 化 ^{みが}、^{みが} 文 ^{みが} 政 ^{みが} 以 ^{みが} 後 ^{みが} の ^{みが} 好 ^{みが} み ^{みが} と ^{みが} い ^{みが} え ^{みが} も ^{みが} す

る。——その間に、明治中期には、中京美人の輸入が花柳界を風靡した——が、あら
そわれないのは時代の風潮で、そうしたかたむきは、京都を主な生産地としている
だいらびな
内裏雛にすら、顔立ち体つきの変遷が見られる。内裏雛の顔が尖って、神経質な
とが
ものになったのは、明治の末大正の初めが甚しかった。

上古の美人は多く上流の人のみが伝えられている。稀には国々の麗わしき少女
まれ うる おとめ
を、花のように笑めるおもわ、月の光りのように照れる面とうたつて、肌の艶極
おもて つや
めてうるわしく、額広く、うれい 愁の影などは露ほどもなく、輝きわたりたる面差
おもざし
晴々として、まぶた 眼瞼重げに、まなじり 眦長く、ふくよかな匂わしき頬、鼻は大きからず
ほほ
高すぎもせぬ柔らか味を持ち、いかにもものどやかに品位がある。光 明 皇 后 の
こうみょうこうごう
御顔をうつし 奉 ったという仏像や、その他のものにも当時の美女の面影をうかが
たてまつ
う事が出来る。上野博物館にある 吉 祥 天 女 の像、出雲大社の
きつしょうてんによ はずも
くしいなだひめ 奇 稲 田 姫 の像などの 貌 容 に見ても知られる。
がんよう

平安朝になつては美人の形容が「あかかがちのように 麗々しく」と讃えられてい
れいれい
る。「あかかがち」とは 赤 酸 漿 の実の古い名、当時の美女はほおずきのように
たんばほおずき み
丸く、赤く、艶やかであつたらしくも考えられる。赤いといつても色 艶 うるわしく、
いろつや
匂うようなのを言つたのであろう。古い絵巻などに見ても、骨の細い、肉つきのふつく
りとした、額は広く、頬も豊かに、丸々とした顔で、すこし首の短いのが描いてある。

そのころは、髪^の毛^の長^いの^と、涙^の多^いの^とを女^の命^としてでもいたように、物語な
どにも姿よりは髪^の美^しき^が多^くか^かれ、敏^感な涙^が多^くか^かれてあるが、徳川期^の末
の江戸女^のように、意^気地^と張^りを命^にして、張^詰め^た溜^み涙^ををぼろぼろこぼすの
と違^つて、細^い、きれ^の長^い、情^のあ^る 眈^ををう^るませ、几^帳の^かげ^にし^とし
とと、春^雨の^降る^よう^に泣^きぬ^れ、打^かこ^ちた^姿である。

鎌倉時代^{から}室町^の頃^にか^けては、前^期の女^性を 緋^桜、また^は藤^の花^にた^とう^れ
ば、梅^の芳^しさ^と、山^桜の、無^情を^観じ^た風^情を^見出^すこ^とが^出来^る。生^に対^す
る深^き執^着と、諦^めと^を持^たせ^られ^た美^女た^ちは、前^代の女^性ほ^ど華^やか^に、湿^や
かな趣^きは^かけ^ても、寂^と渋^味が^添う^たと^いえ^もす^る。こ^の期^の女^性の、無^情感^と
諦^めこ^そ、女^性に^は実^に一^大事^とな^つた^のだ^が、美^人観^には^記す^必要^もな^から^う。

徳川期^に至^つては、元^禄の美^人と文^化以^後の^とは^まる^で好^みが^違つ^てい^る。し^かし^こ
こ^に来^て、く^つき^りと^目立^つの^は、上^流の貴^女ば^かり^が目^立つ^てい^たの^から、す^べて^が
平^民的^にな^つた^事で^ある。ひ^とつ^には^当時^の上^流と^目さ^れる^大名^の奥^方や、姫^君な^どは、
籠^の鳥^同様^に檻^禁し^てし^まつ^たの^で、勢^い下^々の^女の^気焰^が高^くな^つた
わけ^であ^る。湯^女、遊^女、掛^茶屋^の茶^酌女^等は、公^然と^多く^の人^に接^しる
か^ら、美^貌は^すぐ^と拡^まつ^た。

当^世貌^は少^しく^丸く、色^は薄^模様^にし^て、面^道具^の四^つ不^足な^く揃^へて、目
は^細き^を好^まず、眉^厚く^鼻の^間せ^わし^から^ずし^て次^第に^高く、口^小さ^く、齒^並あ^ら
／＼^とし^て白^く、耳^長み^あつ^て縁^浅く、身^を離^れて^根ま^で見^えす^き、額^ぎは^わざ^と

ならず自然に生えとまり、首筋たちのびて、^{おく}後れなしの後髪、手の指はたよわく、長
みあつて ^{つめ}爪薄く、足は ^{もんぶ}八文三分の定め、^そ親指反つて裏すきて、胸間常の人より長く、
腰しまりて ^{ししおき}肉置たくましからず、尻はゆたかに、物ごし衣装つきよく、姿の位そな
はり、^{こころだて}心立おとなしく、女に定まりし芸すぐれて ^{よろず いや}万に賤しからず、身にほ
くろひとつもなき——

^{さいかく}と井原西鶴はその著『一代女』で所望している。

明治期の美女は感じからいつて、西鶴の注文よりはずつと ^{あら}粗つぽくザラになつた
(身にほくろ一つもなき) というに反して、西洋風に額にほくろを描くものさえ出来た。

徳川期では、^{よしわら}吉原や ^{しまばら}島原の ^{くるわ}廓が社交場であり、遊女が、上流の風俗をま
ねて更に派手やかであり、そして、女としての教養もあつて、その代表者たちにより、
時代の女として見られた。それに次いで、明治期は、芸者美が代表していたといえる。

貴婦人の社交も ^{ひろ}広まり、女子 ^{たいとう}擡頭の気運は盛んになつたとはいえ、そしてまた、

女学生スタイルが、追々に花柳界人の ^{ちようりよう}跳梁を ^{くちく}駆逐したとはいえ、それは、大

正の今日にかかる ^{かけはし}棧であつて、明治年間ほど芸妓の ^{ばっこ}跋扈したことはあるまい。

^{ちようど}恰度前代の社交が吉原であつたように、明治の政府と政商との会合は多く新橋、赤

坂辺の、^{かりゆうめいあん}花柳明暗の地に集まつたからでもあろう。芸妓の鼻息はあらくなつて、

^{まじめ}真面目な子女は眼下に見下され、要路の ^{けんかんきしん}頭官貴紳、紳商は友達のように見なされ
た。そして誰氏の夫人、彼氏の夫人、歴々たる人々の正夫人が芸妓上りであつて、遠き

昔はいうまでもなく、昨日まで幕府の役人では小旗本といえど、そうした身柄のものは正夫人とは許されなかつたのに、一躍して、雲井に近きあたりまで出入することの出来る立身出世——玉の輿の風潮にさそわれて、家憲厳しかつた家までが、下々では一種の見得のようにそうした家業柄の者を、いきなり家庭の主婦として得々としていた——これは中堅家庭の道德の乱れた源となつた。

しかしながら、それは国事にこと茂くて、家事をかえり見る暇のすけなかつた人や、それほどまでに栄達して、世の重き人となろうとは思わなかつた人の、軽率な、というより、止むを得ぬ情話などが絡んでそうなつたのを——しかもその美妓たちには、革進者を援ける気概のあつた勝れた婦人も多かつたのだ——世人は改革者の人物を欽仰して、それらのことまで目標とし、師表とした誤りである。ともあれ、前時代の余波をうけて、堅気な子女は深窓を出ず、几帳をかなぐつて、世の中に飛出したものもなかつたので、勢い明治初年から中頃までは、そうした階級の女の跳躍にまかせるより外はなかつた。

ここに燦として輝くのは、旭日に映る白菊の、清香芳ばしき明治大帝の皇后宮、美子陛下のあれせられたことである。

陛下は稀に見る美人でおわしました。明眸皓齒とはまさにこの君の御事と思わせられた。いみじき御才学は、包ませられても、御詠出の御歌によつて洩れ承る事が出来た。

明治聖帝が日本の国土の ^{かがや} 煌 ^{ごんげ} きの権化でおわしますならば、桜さく国の女人の精華は、この后であらせられた。大日輪の光りの中から聖帝がお生まれになったのならば、
てんちふくいく ^{しべ}
天地馥郁として、花の咲きみちこぼれたる匂いの 薔 のうちに、麗しきこの

めぎみ
女君は御誕生なされたのである。明治の御代に生れたわたしは、何時もそれをほこり

にしている。一天 ^{ばんじょう} 万 ^{ぎよざ} 乗 ^{かたわ} の大君の、御座の 側 らにこの后がおわしましてこそ、

日の本は天照大御神の末で、東海貴姫国とよばれ、八面 ^{れいろう} 玲 ^{ぎよくふようほう} 瓏 ^{ほう} の玉芙蓉峰を

持ち、桜咲く ^{あさひ} 旭 日の煌く国とよぶにふさわしく、『竹取物語』などの生れるのもことわりと思うのであった。

我等女性が忘れてならないこの后からの ^{たまもの} 賜 物は、長い間の習わしで、女性の心が盲目であつたのに目を開かせ、心の眠っていたものに夢をさまさせ、女というもの自身のもつ美果を、自ら耕し養えとの御教えと、美術、文芸を、かくまで盛んに導かせたま ^{すた}
いしおんことである。それは 廃 れたるを起し、新しきを招かれたそればかりでなく、音楽や芸術のたぐいにとりてばかりでなく、すべての文教のために、忘れてならないお方でおわしました。主上にはよき后でおわしまし、国民にはめでたき国の宝と、思いあげる御方であらせられた。

この、後の宮の御側には、平安朝の ^{こうきゆう} 後 ^{さいえん} 宮 にもおとらぬ 才 媛 が多く集められた。五人の少女を選んで海外留学におつかわしになったことや、十六歳で見出された

しもだうたこ ^{きしだとしこ} ^{しょうえん}
下田歌子女史、岸田俊子（ 湘 煙 ）女史があり、女学の道を広めさせられ

おぼしめし ^{おんよとく}
た 思 召 は、やがて女子に稀な天才が現われるときになって、 御 余 徳 がしのばれることであろう。一条左大臣の御娘である。

わたしは此処に、代表的明治美人の幾人かの名を^{しる}記そう。そしてその中からまた幾人かを選んで、短かい伝を記そう。上流では北白川宮大妃富子殿下、故^{ありすがわのみや}有栖川宮妃慰子殿下、^{しんじゆ つぼね}新樹の局、高倉典侍、現岩倉侯爵の祖母君、故^{さいごうつぐみち}西郷従道侯の夫人、現前田侯爵母堂、近衛公爵の故母君、^{おおくま}大隈侯爵夫人綾子、戸田伯爵夫人極子を数えることが出来る。東伏見宮周子殿下、^{やまうちさだこ}山内禎子夫人、^{まえだようこ}有馬貞子夫人、^{いとうあきこ}前田漾子夫人、九条武子夫人、伊藤夫人、小笠原貞子夫人、寺島鏡子夫人、稲垣栄子夫人、岩倉桜子夫人、古川富士子夫人の多くは、大正期に語る人で、明治の過去には名をつらねるだけであろうと思われる。

山県公の前夫人は公の恋妻であつたが二十有余年の^{えんおう}鴛鴦の夢破れ、公は^{かたわどり}片羽鳥となつた。その後、現今の貞子夫人が^{そばちこ}側近う仕えるようになった。幾度か正夫人になるという^{うわさ}噂もあつたが、彼女は卑下して自ら夫人とならぬのだともいうが、物堅い公爵が許さず、一門にも許さぬものがあつて、そのままになつていとう事である。表面はともあれ、^{かつら}故桂侯などは正夫人なみにあつかわれたという、その余の^{ともがら}輩にいたつてはいうまでもない事であろう。すれば事實は公爵夫人貞子なのである。

貞子夫人の姉たき子は^{ますだたかし}紳商益田孝男爵の側室である。益田氏と山県氏とは単に^{ちやじ}茶事ばかりの^{とも}朋友ではない。その関係を知っているものは、彼女たち姉妹のことを、

もちつもたれつの仲であるといった。相州板橋にある山県公の古稀庵^{こきあん}と、となりあう益田氏の別荘とはその密接な間柄をものがたっている。

姉のたき子は瘦^やせて眼の大きい女である。妹の貞子は色白な謹^{つつ}ましやかな人柄である。今日の時世に、維新の元勳元帥の輝きを額にかざし、官僚式に風靡し、大御所^{おおごしよ}公の尊号さえ付けられている、大勳位公爵を夫とする貞子夫人の生立ちは、あわれにもいたましい心の疵^{きず}がある。彼女たち姉妹がまだ十二、三のころ、彼女たちの父は、日本橋芸妓歌吉と心中をして死んだ。そういう暗い影は、どんなに無垢^{むく}な娘心をいためたであろう。子を捨ててまで、それもかなり大きくなった娘たちを残して、一家の主人が心中する——近松翁の「天の網島^{てん あみじま}」は昔の語りぐさではなく、彼女たちにはまざまざと眼に見せられた父の死方である。明治十六年の夏、山王^{さんのう}——麹町日枝神社^{ひえ}の大祭のおりのことであつた。芸妓歌吉は、日本橋の芸妓たちと一緒に手古舞^{てこまい}に出た、その姿をうみの男の子で、鍛冶屋^{かじや}に奉公にやつてあるのを呼んで見物させて、よそながら別れをかわした上、檜物町^{ひものちょう}の、我家の奥蔵の三階へ、彼女たちの父親を呼んで、刃物で心中したのであつた。

彼女たちは後に、芝居でする「天の網島」を見てどんな気持ちに打たれたであろうか、かみやじへえ紙屋治兵衛は他人の親でなく、浄瑠璃でなく、我親そのままなのである。京橋八官町の唐物屋^{とうぶつや}吉田吉兵衛なのである。

彼女たちの父は入婿^{いりむこ}であつた。母は氣強^{きごう}な女であつた。また芸妓歌吉の母親や

妹も気の強い気質であった。その間に立つて、気の弱い男女は、互いに可愛い子供を残して身を^{ほろぼ}亡したのである。其処に人世の暗いものと、心の^{かつとう}葛藤とがなければならぬ。結びついて^{から}絡まった、ついには身を殺されなければならない悲劇の要素があったに違いない。

その当時の新聞記事によると、歌吉の母親は、^{あいて}対手の男の遺子たちに向って、お前方も^{おおき}成長くなるが、間違つてもこんな真似をしてはいけないという意味を言聞かして、^{いつてき}涙一滴こぼさなかつたのは、気丈な婆さんだと書いてあつた。その折、言聞かされ^{うなず}て頷いていた少女が、たき子と貞子の姉妹で、彼女の母親は、彼女たちの父親を死に誘つた、憎みと^{うら}怨みをもたなければならないであろう^{げいしゃ}妓女に、この^{きょうだい}姉妹をした。彼女たちは^{すぐ}直に新橋へ現れた。

複雑な^{しんり}心裡の解剖はやめよう。ともあれ彼女たちは幸運を^か勝ち得たのである。情も恋もあろう若き身が、あの老侯爵に^{かしず}侍いて三十年、いたずらに青春は過ぎてしまつたのである。老公爵百年の後の彼女の感慨はどんなであろう。夫を芸妓に心中されてしまつた彼女の母親は、新橋に吉田家という芸妓屋を出していた。そして後の夫は講談師^{はくち}伯知である。夫には、日本帝国を背負っている自負の大勲位公爵を持ち、義父に講談師伯知を持つた貞子の運命は、明治期においても数奇なる美女の一人といわなければならないまい。

その他^{しゆくとか}淑徳の高い故伊藤公爵の夫人梅子も前身は^{ばかん}馬関の芸妓小梅である。山本権兵衛伯夫人は品川の妓楼に身を沈めた女である。桂公爵夫人加奈子も名古屋の

きていかせつけん

旗亭香雪軒の養女である。伯爵黒田清輝画伯夫人も柳橋でならした美人である。

大倉喜八郎夫人は吉原の引手茶屋の養女ということである。銅山王古川虎之助氏母堂は、柳橋でならした小清さんである。

もぎ

横浜の茂木、生糸の茂木と派手にその名がきこえていた、生糸王野沢屋の店の没落は、七十四銀行の取付け騒ぎと共にまだ世人の耳に新らしいことであろう。その茂木氏の繁栄をなさせ、またその繁栄を没落させたかげに、当代の若主人の祖母おちようのある事

を知る物はすけない。彼女は江戸が東京になつて間もない赤坂で、^{ときわす}常磐津の三味線をとつて、師匠とも町芸者ともつかずに出たが、思わしくなかつたので、当時開港場として盛んな人気の集つた、金づかいのあらい横浜へ、みよりの琴の師匠をたよつて来て芸

者となつた^{でんぼう}伝法な、^{かけ}気つぷのよい、江戸育ちの歯ぎれのよいのが、大きな運を賭てかかる投機的の人心に合つて、彼女はめきめきと売り出した。その折、彼女の野心を満足させたのは、横浜と共に太つてゆく資産家野沢屋の旦那をつかまえたことであつた。

そうこう

野沢屋茂木氏には^{そうこう}糟糠の妻があつた。彼女は遊女上りでこそあるが、一心になつ

て夫を助け家を^{とま}富した大切な妻であつた。その他に野沢屋には総番頭支配人に、生糸店として野沢屋の名をなさせた大功のある人物があつた。その二人のために、さすがに

おぼ

溺れた主人も彼女をすぐに家に入れなかつた。長い年月を彼女は外妾として暮さなければならなかつた。

めい おい

茂木氏夫妻には実子がなかつた。夫婦の^{めい}姪と^{おい}甥を呼び寄せ、めあわせて二代目とした。ところが外妾の方には子が出来た。女であつたので後に養子をしたが、現代の惣兵衛氏の親たちで、彼女が野沢屋の大奥さんとして、出来るだけの栄華にふける種をお

ろしたのであった。

過日あ^{ぼつらく}の没落騒動があつた時に、おなじ横浜に早くから目をつけて来たが、茂木氏の

ような運^{つか}を掴み得^{くにもと}ないで、国許に居るときよりは、一層せちがらい世を送っている者たちはこう言った。

「とうとう本妻の罰があつたのだ。悪運も末になって傾いて来たのだ。」

なるほど彼女はかなり深刻な悲慘な目を見たのである。彼女は王侯貴人にもまさるぜいたく贅^{ぜいたく}沢が身にしみてしまつていた。そして彼女のはなはだしい道楽——彼女が

いきがい生甲斐あるものとして、生きいるうちは一日も止めることの出来ないように思つてい

た、芸人を集めて、かるた遊び^{ろうか}をしたり、弄花^{なぐさ}の慰みにふけることは、どうして

もやめなければならないような病気に^{しゆしよく}かかつていた。長い間の酒色、放埒^{ほうらつ}の

むくいからか、彼女の体は自由がきかなくなつていた。それでも彼女の奢^{おご}りの癖は、

吉原の老妓や、名古屋料理店^{だいます}の大升の娘たちなどを、入びたりにさせ、機嫌をとらせていた。看護婦とでは、十人から十五人の人たちが、彼女の手足^{すべ}のかわりをして慰め

ていた。風呂に入る時などは幕を張り、屏風^{びょうぶ}をめぐらし、そして静々^{しずしず}と、ふく

よかな羽根布団にくるまれて、室内を軽く^{すべ}亡る車で、それらの人々にはこぼせるのであつた。野沢屋の店が、この親子三人——彼女は祖母で、娘は未亡人となり、主人はまだ無妻であつた——のために月々仕払う生活費は一万円であつたということである。無論たつた三人のために台所番頭という役廻りまであつて、その人たちは立派な一家をなし、中流以上の家計を営んでいたのである。

お上^{かみ}女中、お下^{しも}女中、三十人からの女中が一日、齷齪^{あくせく}とすわる暇もなく、ざ

わざわしていた家である。台所もお^{かみ}上の台所、お^{しも}下の台どころとわかれ、器物などもそれぞれに応じて来客にも等差が非常にあった。

彼女はそうした生活から、そうした^{ほうしょう}放縦の疲労から老衰を早めた。おりもおり、さしものに誇りを持った横浜の土地から、或夜、ひそかに逃げださなければならなかつた。彼女は幾台かの自動車に守られて、かねて東京へ来たおりの遊び場処にと、それも^{ひいき}鼻屑のあまりにかい取っておいた、赤坂仲の町の俳優^{おのえばいこう}尾上梅幸の旧宅へと隠れた。

とはいえ彼女はさすがに苦勞をした女であり、また身にあまる栄華を尽したことをも悟っていたのか、家の退転については、あまり見苦しい態度はとらなかつたということである。病床にある彼女はすっかり諦めて、これが本来なのだ、もともと通りなのだと達観しているとも聞いたが、^{どこ}何処やらに非凡なところがある女という事が知れる。

そうした幸運の人々の中には現総理大臣^{はらたかし}原敬氏の夫人もある。原氏の前夫人は^{なかいおうしゅう}中井桜洲氏の愛嬢で美人のきこえが高かつたが、^{ほうたん}放胆な家庭に人となつたので、有為の志をいなく青年の家庭をおさめる事は出来にくく離別になつたが、困らぬように^{ないない}内々面倒は見てやられるのだとも聞いていた。現夫人は、紅葉館の^{ひと}妓だと
いうことである。丸顔なヒステリーだというほかは知らない。おなじ紅葉館の^{まいこ}舞妓で、^{さかえ}栄いみじい女は^{はくぶんかん}博文館主大橋新太郎氏夫人須磨子さんであろう。彼女は何の理由でか、家を捨て東京へ出て来ていたある旅館の若主人の、放浪中に生せた娘であつたが、^{ひい}舞踊にも秀で、容貌は立並んで^{ひときわみごと}一際美事であつたため、若いうちに大橋氏の夫人として入れられた。八人の子を生んでも衰えぬ容色を持っている。越後から出

てほんのしよし一書肆にすぎなかつた大橋氏は、いまでは経済界中枢の人物で、我国大実業

家中の幾人かであろう。かたわ傍らに大橋図書館をひかえた宏荘の建物の中に住い、令嬢

豊子さんは子爵金子氏れいし令嗣の新夫人となっている。よろずに思いたらぬことのない

おきふ起伏しであろう。明治の文豪尾崎紅葉氏の「こんじきやしや金色夜叉」は、いわやさぎなみ巖谷小波氏

と須磨子夫人をとつたものと噂されたが、小波氏は博文館になくてならない人であり、

童話の作家として先駆者である。氏にも美しくけん賢なるはんりよ伴侶がある。

大橋夫人は美しかつた故にそうした艶聞誤聞を多く持つた。

長者とは——ただ富があるばかりの名称ではない。渋沢男爵こそ、長者の相をも人柄をも円満に具備した人だが、兼子夫人も若きおりは美人の名が高かつた。彼女が渋沢氏の家の人となるときに涙ぐましい話がある。それは、なさぬ仲の先妻の子供があつたか

らのなんのといふのではない。あぶらぼり深川油堀の伊勢八という資産家の娘に生れた兼子の浮き沈みである。

油堀は問屋町で、伊勢八は伊東八兵衛という水戸侯のきんすごようたし金子御用達であつた。伊

勢屋八兵衛の名は、横浜に名高かつた天下の糸平と比べられて、米相場にもドル洋銀相場に

も威をふるつたものであつた。兼子は十二人の子女の一人で、十八のおりごうしゅう江州か

むこら婿を呼びむかえた。かくて十年、家附きの娘は気兼もなく、娘時代と同様、

ものみゆさん物見遊山に過していたが、かたむ傾く時にはさしもの家も一たまりもなく、わず僅かの

てちが手違いから没落してしまつた。婿になつた人も子まであるに、おうみ近江へ帰されてしま

った。（そのころ明治十三年ごろか？）市中は大コレラが流行していて、いやが上にも没落の人の心をふるえさせた。

彼女は逢^あう人ごとに芸妓になりたいと頼んだのであつた「大好きな芸妓になりたい」
そういう言葉の裏には、どれほどの涙が秘められていたであろう。すこしでも家のものに余裕を与えたいと思うところと、身をくだすせつなさをかくして、きかぬ気から、「好きだからになりたい」といって、きく人の心をいためない用心をしてまで身を金にさえようとしていた。両国のすしやという口^{くちい}入れ宿は、そうした事の世話をするからと頼んでくれたものがあつた。すると口入宿では^{めかけ}妾の口ではどうだといつて来た。

妾^{いや}というのならばどうしても嫌だと、口入れを散々手古摺らした。零^{てこず}落^{おちぶ}れてもきぐらい
気^{きぐらい}位をおとさなかつた彼女は、渋沢家では夫人がコレラでなくなつて困っているからというので、後の事を引受けることになつて連れてゆかれた。その家が以前の^{わがや}我家——倒産した油堀の伊勢八のあとであろうとは——彼女は目くらめく心地で台所の敷居を踏んだ。

彼女はいま財界になくてならぬ^{だいめいし}大名士の、時めく男爵夫人である。^{あすかやま}飛鳥山の別荘に^{おきふ}起臥しされているが、深川の本宅は、思出の多い、彼女の一生の振出しの家である。

三

さて明治のはじめに娼妓解放令の出た事を、当今の婦人は知らなければならない。それはやがて大流行になつた男女交際の^{さきがけ}魁をしたもので、いわゆる明治十七、八年

ろくめいかん
頃の鹿鳴館時代——華族も大臣も実業家も、令夫人令嬢同伴で、毎夜、夜を徹し

て舞踏に夢中になった、西洋心酔時代の先驅せんくをなしたものであつた。その頃吉原には、

きんぺいろういまむらさき
金瓶楼今紫いにしえ たゆうしよくが名高い一人であつた。彼女は昔時の太夫職の誇
りをとどめた才色兼美の女で、廃藩置県のころの諸侯を呼びよせたものである。

やまのうちようどう
山内容堂侯は彼女に、その頃としては実に珍らしい大形の立鏡たてかがみを贈ら

れたりした。彼女は今様男舞いまようおとこまいを呼びものにしていて、緋の袴ひはかまに

すいかんたてえぼし
水干立烏帽子、ものめずらしいその扮装ふんそうは、彼女の技芸と相まってその名を

高からしめた。明治廿四年依田学海翁よだがくかいが、男女混合の演劇をくわだてた時に、彼女

ちとせべいは いちかわくめはち もりずみげつか じよぐん
は千歳米坡や、市川九女八の守住月華と共に女軍として活動を共

にしようと馳せ参じた。その後も地方を今紫の名を売物にして、若い頃の男舞いを持ち

廻っていた様であつた。一頃ひところは、根岸に待合めいたこともしていた。晩年に夫とし

ていたのは、彼の相馬事件——子爵相馬家のお家騒動で、腹違いの兄弟の家督争いであ

つた。兄の誠胤せいいんとよばれた子爵が幽閉され狂人とされていたのを、旧臣

にしごおりごうせい
錦織剛清が助けだした——の錦織剛清であつた。

遊女に今紫があれば芸妓に芳町よしちよう よねはちの米八があつた。後に千歳米坡と名乗って

舞台にも出れば、寄席にも出て投節よせ なげぶしなどを唄っていた。彼女はじきに乱髪らんぱつにな

る癖があつた。席亭せきていに出ても鉢巻のようなものをして自慢の髪を——ある折はばら

りと肩ぐらいで切っている事もあつた。彼女が米八の昔は、時の人からたつた二人の

しゅんもう すえまつけんちよう こうみようじさぶろう
俊 髦 として許された男—— 末 松 謙 澄 と 光 明 寺 三 郎 ——いず

れをとろうと思ひ迷つたほど、思上つた気位で、引手あまたであつた。とうとうその一

人の光明寺三郎夫人となつたが、天は、その能ある才人に ^{じゆ} 寿 をかさず、企図は総て空
しいものとされてしまった。彼女はその後、浮世を真つすぐに送る気をなくしてしまつ

て、^{としゆ} 斗 酒 をあおつて席亭で小唄をうたいながら、いつまでも鏡を見てくらす生涯を送

るようになった。しかし ^{でんぼう} 伝 法 な、負けすぎらいな彼女も寄る年波には争われぬ。

^{そとぼりせん}
ある夜、外 堀 線 の電車へのつた時に、美女ではあるが、何処やら年齢のつろくせ
ぬ不思議な女が乗合わせた、と顔を見合わせた時に、彼女はそれと察してかクルリと後
をむいて、かなり長い間を立つたままであつた。席はむしろすきすぎているのであつた

が、彼女は正体を見あらわされるのを ^{きら} 厭 つたに違ひなかつた。艶やかに房やかな黒髪

は、巧妙にしつらわれた ^{かつら} 鬘 なのは、額でしれた。そして悲しいことに、釣り草をに

ぎる手の甲に、^{としかず} 年 数 はかくすことが出来ないうでいた。

女役者として ^{ぎぜん} 巍 然 と ^{どうちやく} 男優をも 撞 着 せしめた技量をもつて、小さくとも三崎座

に同志を ^{きゆうごう} 糾 合 し、後にはある一派の新劇に文士劇に、なくてはならないお師匠番と

して、女団洲の名を ^{はずか} 辱 しめなかつた ^{いちかわくめはち} 市 川 九 女 八 ——^{いわいくめはち} 前名岩 井 糸 八 ——

があり、また新宿 ^{とよくらろう} 豊 倉 楼 の遊女であつて、後の横浜 ^{ふつきろう} 富 貴 楼 の ^{おかみ} 女 将 となり、

明治の功臣の誰れ彼れを友達づきあいにして、種々な画策に預つたお倉という ^{じよけつ} 女 傑

がある。お倉は新宿にいるうちに、有名な堀の芸者小万と男をあらそい、美事にその男とそいとげたのである。彼女は養女を多く仕立て、時の頭官に結びつくよすがとした、うんていはやしだかめたろう すいかんちよう
雲 梯 林 田 亀 太 郎 氏—— 粹 翰 長 として知られた、内閣書記翰長もま

じよせい
たお倉の 女 婿 である。お倉は老ても身だしなみのよい女であつて、老年になつても

顔は艶々としていた。切髪のなでつけ 被 布 姿 で、着物の 裾 を長くひいてどこの

こうしつ
後 室 かという容体であつた。

ゆうめいろう しろはかた
有 明 楼 のお菊は、白 博 多 のお菊というほど白博多が好きで名が通つていた。

それよりもまた、その頃の人気俳優 沢 村 宗 十 郎 —— 助 高 屋 高 助

——を夫にむかえたのと、宗十郎が舞台で扮する 女 形 はお菊の好みそのままであつた

ことさら たのすけ
ので 殊 更 名高かつた。ことに宗十郎の実弟には、評判の高い 田 之 助 があつたし、

でいり
有明楼は文人画伯の多く 出 入 した家でもあつたので、お菊はかなりな人気のものであつ

まつちやま いまどばし さんやぼり
た。待 乳 山 を背にして 今 戸 橋 のたもと、竹屋の渡しを、 山 谷 堀 をへだてた

ぼくてい こととい みめぐり
となりにして、 墨 堤 の 言 問 を、 三 囲 神 社 の 鳥 居 の 頭 を、 向 岸 に 見 わ た す 広

ひとかまえ きてい すま
い 一 構 が、評判の 旗 亭 有明楼であつた。いま息子の宗十郎が 住 っている家は、

あの広さでも、以前の有明楼の、四分の一の構えだということである。

におとりおいらん
此処に若いころは吉原の 鴉 鳥 花 魁 であつて、田之助と浮名を流し、互いにせ

ぬぎす れんじそと
かれて、逢われぬ雪の日、他の客の 脱 捨 した衣服大小を、 櫛 子 外 に待っている男

のところへともたせてやって、上にはおらせ、やつと引き入^{いれ}させたという情話をもち、

待合「気楽の女将」として、花柳界にピリリとさせたお金^{きん}の名も、洩^{もら}すことは出来まい。この女も、明治時代の裏面の情史、暗黒史をかくには必ず出て来なければならない女であった。

きよもと よう たへえ えんじゆだゆう
清元お葉は名人太兵衛の娘で、ただに清元節の名人で、夫延寿太夫を引立て、養子延寿太夫を薫陶したばかりでなく、彼女も忘れてならない一人である。京都なかにしきみお かたまり とこ
老妓中西君尾は、その晩年こそ、貰いあつめた黄金を、円き塊にして床に安置したような、利殖儉約な京都女にすぎないように見えたが、維新前の

こくじかんなん
国事艱難なおりには、憂国の志士を助けて、義侠を知られたものである。井上侯

もんた
がまだ聞太といった侍のころ深く相愛して、彼女の魂として井上氏の懐に預けておい

きようじん
た手鏡——青銅の——ために、井上氏は危く凶刃をまぬかれたこともあつた。彼

いくまつ
女は桂小五郎の幾松——木戸氏夫人となつた——とともに、勤王党の京都女を代表する美人の幾人かのうちである。

まつ とみさこ
歌人松の門三艸子も数奇な運命をもつていた。八十歳近く、半身不随になつて、妹

ろうおく
の陋屋でみまかつた。その年まで、不思議と弟子をもつていて人に忘れられなかつ

あだもの
た女である。その経歴が芸妓となつたり、妾となつたりした仇者であつたために、

きやす
多くそうした仲間の、打解けやすい気易さから、花柳界から弟子が集つた。彼女は顔

しゆせき ふすま
の通りに手跡も美しかった。彼女の絶筆となつたのはたつみやの襖のちらし

書であろう。その^{たつみや ひな}辰巳屋のお雛さんも神田で生れて、吉原の引手茶屋^{きりさ}桐佐の養女

となり、日本橋区^{なかつ}中洲の旗亭辰巳屋おひなとなり、^{ごうき}豪極にきこえた時の顯官山田

〇〇伯を^{つか}掴み、一転^{ちくはくえん}竹柏園の女歌人となり、バイブルに親しむ聖徒となり、再

転、川上^{さだやつこ}貞奴の「女優養成所」の監督となって、劇術研究に渡米し、米国ポスト
ンで客死したとき、財産の全部ともいうほどを、昔日の恋人に残した佳話の持主で、書
残されない女である。

^{みさこ}三艸子の妹もうつくしい人であったが、^{おのえ}尾上いろともいい、^{おぎのやえざり}荻野八重桐とも名
乗って年をとってからも、踊の師匠をして、本所のはずれにしがな暮しをしていた。

この姉妹が盛りのころは、深川の芸者で姉は小川屋の^{こさん}小三といい、または八丁堀

やぐらした^{たけ}榎下の芸者となり、そのほかさまざまの生活をして、好き自由な日を暮しながら

歌人としても相当に認められ、^{いのうえふみお まつ と}井上文雄から松の門の名を許され、文人墨客の

間を縫うて、彼女の名は^{けんでん}喧伝されたのであった。その頃は芸者が意気なつくりをよ

ろこんで、^{すあし}素足の心意気の時分に、彼女は^{あつけしょう}厚化粧で、派手やかな、人目を驚か

す扮飾をしていた。山内侯に見染められたのも、水戸の^{たけだこううんさい}武田耕雲斎に思込まれ

て、隅田川の舟へ連れ出して^{はくじん}白刃をぬいて^{いど}挑まれたのも、みな彼女の若き日の夢

のあとである。彼女たちは幕府のころ、上野の宮の御用達をつとめた家の愛娘であった。

したや^{だてしゃ}下谷一番の伊達者——その唄は彼女の娘時代にあてはめる事が出来る。店が零落し

てから、ある大名の妾となつたともいうが、いかに^{なりゆ}成行こうかも知らぬ娘に、天から

与えられた美貌と才能は何よりもの恵みであつた。彼女は才能によつて身をたてようとした。そして八丁堀 茅場町^{かやばちよう}の国文の大家、井上文雄の内弟子^{うちでし}になつた。彼女たちは内弟子という、また他のものは妾だともいう。しかし妾というのは、その頃はまだ濁りにそまない、あまり美しすぎる娘時代であつたので、とかく美貌のものがうけるねた^{ねた}妬^{ねた}みであつたろうと思われるが、後にはあまり素行の方では評判がよくなかつた。

四

我国女流教育家の泰斗^{たいと}としての下田歌子女史は、別の機会に残して夙^{つと}に後の宮の御見出しにあずかり、歌子の名を御下命になつたのは女史の十六歳の時だというが、あげまき^{あげまき}総角^{そうかく}のころから国漢文をよくして父君を驚かせた才女である。中年の女盛りには美人としての評が高く、洋行中にも伊藤公爵との艶名艶罪^{かまびす}が^{かまびす}囂^{かまびす}しかつた。古い頃の自由党副総理中島信行^{なかじまのぶゆき}男の夫人湘煙^{しょうえん}女史は、長く肺患のため大磯にかくれすんで、世の耳目^{じもく}に遠ざかり、信行男にもおくれて死なれたために、あまりその晩年は知られなかつたが、彼女は京都に生れ、岸田俊子といつた。年少のころ宮中に召された才媛の一人で、ことに美貌な女であつた。この女^{ひと}は^{はき}覇気あるために長く宮中におられず、宮内を出ると民権自由を絶叫し、自由党にはいつて女政治家となり、盛んに各地^{ゆうせい}を遊説し、チャーミングな姿体と、熱烈な男女同権、女権拡張の説をもち、十七、八の花の盛りの令嬢が、島田鬻^{しまだまげ}で、黄八丈^{きはちじょう}の振袖で演壇にたつて自由党の箱入り娘とよばれた。さびしい晩年には小説に筆を染められようとしたが、それも病のた

めにはかばかしからず、母堂に^{みと}看られてこの世を去った。

女性によって開拓された宗教——^{まいすぞくそう}売僧俗僧の多くが仮面をかぶりきれなかった

時において、女流に一派の始祖を出したのは、天理教といわず^{おおもときよう}大本教といわず、

いずれにしても異なる事であった。その中で皇族の身をもって始終精神堅固に、仏教に

よって民心をなごめられた^{むらくもにこう}村雲尼公は、玉を磨いたような^{おかお}貌容であった。温和

と、慈悲と、^{せいれい}清麗とは、似るものもなく^{てんがれいろう}典雅玲瓏として見受けられた。紫の

衣に、菊花を金糸に縫いたる^{わけさ}緋の輪袈裟、御よそおいのととのうたあでやかさは、その

頃美しいものの^{たと}譬えにひいた福助——中村歌右衛門の若盛り——と、松島屋——現今

の^{かたおかがどう}片岡我童の父で人気のあった^{びぼう}美貌の^{たちやく}立役——を一緒にしたような^{かお}お貌

だとひそかにいいあっていたのを聞覚えている。また、予言者と称した

「^{しんせいきようだん}神生教壇」の宮崎虎之助氏夫人光子は、上野公園の^{じゆかせきじよう}樹下石上を講

壇として、路傍の群集に説教し、死に至るまで道のために尽し、諸国を伝道し廻り、迷

える者に福音をもたらしていたが、病い重しと知るや一層活動をつづけてついに終りを

早うした。その遺骨は青森県の十和田湖畔の自然岩の下に葬られている。強い信仰と理

性とに引きしまった彼女の顔容は、おごそかなほど美しかった。彼女は夫と並んで、そ

の背には一人子の照子を背負っていた。そしていつも貧しい人の群れにまじって歩いて

いた。ある時は月島の長屋住居をし、ある時は一膳めしやに一食をとっていた。栗色の

マーブル

大理石で彫ったようなのが彼女であった。

宗教家ではないが、愛国婦人会の建設者^{おくむらいおこ}奥村五百子も立派な容貌をもっていた。

彼女が会を設立した意味は今日ほど無意義なものではなかった。彼女は幼いころから愛

国の士と交わっていたので、彼女の血は愛国の熱に燃えていたのである。彼女は尋常一様の家婦としてはすごされないほど骨がありすぎた。彼女はつくし筑紫の千代の松原近き寺院の娘に生れたが、父は近衛公の血をひいていて、父兄ともに愛国の士であつたゆえ、彼女も幼時から女らしいことを好まず、危い使いなどをしたりした。しかし一たん彼女は夫を迎えると、貞淑温良な、忠実な妻であつた。彼女の夫はせんちや煎茶を売りにゆくに河を渡つて、あやまつて売ものをぬら濡してしまうと、山の中にはいつて終日、茶を乾しながら書籍を読みふけていて、やくにたたなくなつた茶がらを背負つて、一銭もなしで家に帰つて来たりした。彼女は四人の子供を抱えて、そうした夫につかえるために貧苦をなめつくした。ある時は行商となり、ある時は車をおしてものをあきな商い、ある時は夫の郷里にゆく旅費がなくて、かどづ門附けをしながら三味線をひいて歩いたこともあつた。晩年にややこころざし志望を遂げるようになって、すこしも心のひも紐はゆるめず、朝鮮に、支那に、出征兵士をねぎらつて、肺患のおも重るのを知りながら、薬瓶をさげて往來していた。

五

高橋おでんも、まむし蝮のお政も、たまたま偶々悪い素質をうけて生れて来たが、彼女たちもまた美人であつた。おでんもお政も悪がこう嵩じて、盗みから人殺しまでする羽目になつた。それにくらべては、花井お梅は思いがけなく人を殺してしまつたので、ごくり獄裡に長くつながれたとはいえ、それを囚人あつかいにし、出獄してから後も、囚人であつた

事を売物見世物みせもののようにして、舞台にさらしたり、寄席よせに出したりしたのはあんまり

むざん
無惨すぎる。社会は冷酷すぎる。彼女は新橋で売れた芸者であったが、日本橋区の

はまちようがし すいげつ
浜町河岸に「酔月」という料理店をだした。そうした家業には不似合な、あ

んまり堅気な父親をもつていて、恋には一本気な彼女を抑圧しすぎた。我儘わがままで、勝

気で、売れっ見で通して来たきょうまん驕慢な女が、お酒のたちの悪い上に、ヒステリック

になっていた時、心がけのよくない厭味いやみな箱屋に、出過ぎた失礼なことをされては、

前後無差別になってしまったのに同情出来る。彼女は自分の意識しないで犯した大罪を

知ると直すぐに、いさぎよく自首して出た。獄裡きんしんにあつても謹慎していたが、強度の

ヒステリーのために、夜々よよ殺したものに責められるように感じて、その命日になると、

ことに気が荒くなつていたということであつた。幾度かの恩赦おんしやによつて、再び日の

光を仰ぐ身となつたが、薄幸のうちに死んでしまった。

六

ももきち はるもとまんりゆう てるおうみ こい とみたやちよ
ささや桃吉、春本万竜、照近江お鯉、富田屋八千代、

かわかつかちよう とみぎく ぬきんで
川勝歌蝶、富菊、などは三都歌妓の代表として最も擢ぬきんでている女たち

であろう。そして一人、忘れる事の出来ないのは新橋のぼんた——鹿島恵津子夫人

のある事である。

桃吉の「笹屋」は妓名の時の屋号ではない。笹屋の名は公爵いわくらともはり岩倉具張氏と

ともずみ ゆうらくばし
共 棲 のころ、有 楽 橋 の角に開いた三階づくりのカフェの屋号で、公爵の

じょうもんささりんどう
定 紋 笹 竜 胆 からとった名だといわれている。桃吉はお鯉の照近江に居たの

である。照近江から初代お鯉が桂公の ちようしょう
寵 妾 となり、二代目お鯉が西園寺侯爵の
寵愛となった。二代つづいて時の総理大臣侯爵に思われたので、桃吉も発奮したのであ
ろう、彼女は岩倉公を彼女ならではならぬものにしてしまった。そして大勢の子のある

美しい桜子夫人との仲をへだてて やかた
館 を出るようにさせてしまった。そして二人は、

ももきちごてん はて
桃 吉 御 殿 とよばれたほど豪華な住居をつくって住んだりした 果 が、負債のため

に稼がなければならぬという口実で、彼女が ぁ だいらびな
厭きっていた 内 裏 雛 生活から、多くの
異性に接触しやすい、もとの家業に近い店をだしたのであった。彼女は笹屋の主人とな
り、ダイヤモンドをイルミネーションのように飾りたてて、幾十万円かの資産を有して
いたというに、あわれにも公爵家は百余万円の浪費のために、公爵母堂は実家へ引きと

られなければならないというほどになり、 やかた
館 は鬼の高利貸の手に処分されるように

ゆうい
なり、若くて有 為 の身を、笹屋の二階の老隠居と具張氏はなってしまった。桃吉が資

産家になり、権力が くわわ
加 ってゆくと共に、今は爵位を子息にゆずって、無位無官の身

となつた具張氏は いづら
居 愁 い身となってしまった。やがて二人の間に破滅の末の日が来て、

具張氏は寂しい姿で、桜子夫人の もと
許 にと帰っていった。ささやの三階から立ち出た人

てんぴ かくかく きゆうび きつね
には、あまり天 日 が 赫 々とあからさますぎた事であろう。九 尾 の 狐

たまも まえ
玉 藻 の 前 が飛去つたあのような、空虚な、浅間しさ、世の中が急に明るすぎるよ

うに思われたでもあろう。その桃吉は甲州に生れ、旅役者の子だというが、養われたさきは日本橋の魚河岸だったという事である。

ぼんたは貞節の名高く、当時大阪の人にいわせると、日本には、富士山と、
がんじろう
鷹次郎（大阪俳優中村）と、八千代があるといった。富田屋八千代は菅画伯の良
妻となり、一万円とよばれた赤坂春本の万竜も淑雅な学士夫人となっている。祇園

の歌蝶は憲政芸妓として知られ、選挙違反ですこしの間罪せられ、禅門に参堂し、富
菊は本願寺句仏上人を得度して美女の名が高い。

よしちょう やっこ きょうめい かわかみおとじろう
芳町の奴と嬌名高かった妓は、川上音次郎の妻となって、
新女優の始祖マダム貞奴として、我国でよりも欧米各国にその名を喧伝され

た。いまは福沢桃介氏の後援を得て名古屋に綿糸工場を持ち、女社長として東
京にも名古屋にも堂々たる邸宅を控え、日常のおこないは工場を監督にゆくのと毛糸編
物とを専らにしている。貞奴の後に、彼地で日本女性の名声を芸壇にひびかしているの
オペラしばたたまき
は歌劇の柴田環女史であろう。この人々は日本を遠く去ってその名声を高めた

が、海外へは終に出なかつたが、新女優の第一人者として松井須磨子のあつた事も
特筆しなければなるまい。彼女は恩師であり情人であつた島村抱月氏に死別し

て後、はじめて生と愛の尊さを知り、カルメンに扮した四日目の夜に縊れ死んだので
あつた。

それにくらべれば魔術師の天勝は、さびしいかな天勝といたい。彼女はいつま
でも妖艶に、いつまでもおなじような事を繰返している。彼女の悲哀は彼女のみが知る

であろう。

とよたけろしょう たけもとあやのすけ

豊竹呂昇、竹本綾之助の二人は、呂昇の全盛はあとで、綾之助は早

かつた。ゆくとして可ならざるなき才女として江木欣々夫人の名がやや忘れかけ
ると、おなじく博士夫人で大阪の高安やす子夫人の名が伝えられ、蛇夫人とよばれた日
向きん子女史は、あまりに持合わせた才のために、かえって行く道に迷っていられたよ
うであつたが、林きん子として、舞踊家となつた。

九条武子、^{いとうあきこ}伊藤は、大正の美人伝へおくらなければなるまい。^{かきもら}書洩して

ならない人に、樋口一葉女史、^{たざわいなぶね}田沢稲舟女史、^{おおつかなおこ}大塚楠緒子女史があるが余り
長くなるから後日に譲ろうと思う。

——大正十年十月『解放』明治文化の研究特別号所載——

附記 樋口一葉女史・大塚楠緒子女史・富田屋八千代・歌蝶・豊竹呂昇は病死し、田沢稲

舟女史は毒薬を服し、松井須磨子・江木欣々夫人は^{くび}縊れて死に、今や空し。

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和 60）年 11 月 18 日第 1 刷発行

1993（平成 5）年 8 月 18 日第 4 刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和 11）年 2 月発行

初出：「解放 明治文化の研究特別号」

1921（大正 10）年 10 月

入力：門田裕志

校正：川山隆

2007 年 9 月 5 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）](http://www.aozora.gr.jp/)で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。